HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	貧困のなかでおとなになる ： 取材を通して見えてきた子どもの貧困と社会
Author(s)	中塚, 久美子
Citation	教育福祉研究, 19, 57-66
Issue Date	2013-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54014
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN10264662_19_7.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[Journal of Education and Social Work No.19 2013
教育福祉研究　第19号　2013]

貧困のなかでおとなになる
―取材を通して見えてきた子どもの貧困と社会―

中　塚　久美子

1．子どもの貧困問題との出会い

私が子どもの貧困を入社以来ずっと取材しているかというと、そうではありません。

1998年12月に朝日新聞に入社しました。新聞社の全国紙は、最初は地方の総局というところに２、３か所行きます。私は金沢と京都でした。その後、大阪本社の編集センターという記者の書いた原稿を読んで、どこの面に載せて、どのくらいの大きさで扱って、どんな見出しをつけるかという編集者の仕事を4年して、2008年の4月から今の生活文化部にいます。

いつ子どもの貧困というテーマに出会ったかというと2008年です。入社して10年たってからです。2008年の5月でした。最初は部長から、「母子家庭の取材をしろ」と上から降ってきた仕事でした。部長いわく、当時セーフティーネットが次々とやぶれていって落ちていく、その象徴が母子家庭だと。母子家庭を取材してその現状を書くようにいわれて、女性3人で手分けして、取材を始めました。

私が取材にいった母子家庭のお母さんは、高校生と中学生の娘さんと、足の悪い実母と、4人暮らしで公営住宅に住んでいらっしゃいました。色々話を聞くうちに例えば、娘たちが休みの日や長期休暇で「友達と映画に行きたい」とか、あるいは「だれそれのCDが欲しい」と言ったときに、「全部は無理、なんか1個にして」と言って、そんなにお金がだせないという話をしたということや、高校受験のために塾に行った方がいいんじゃないかと塾の説明会にいったら、夏季講習のお金がとても高いということを知ってこれは無理だと。あとは、私立高校を受けたとしても、授業料は払えないから「受けても行かれへんで」と娘に言わなくちゃいけなかったことがすごく辛かった、と。結局、上の娘さんは受かっても私立には行けないから、絶対公立に入るため自分の力よりもちょっと下げて、絶対合格できそうな公立高校を選んでいく、ということでした。

高校に入学する時、低所得者向けの支給型の奨学金が入ってきても、制服や学用品を買ったら全部飛んでいったっていうような話を聞きました。この方、ずっと配送の仕事を休みなくやってらっしゃって、児童扶養手当も受けていた。そのお母さん、最後にぽそっと、自分と同じような状況の知り合いが、役所に行って色々子どもの進路について相談している時に、役所の人に「母子家庭の子が大学進学しようと思うのが間違いだ」と言う風にいわれたと聞いたけど、「子どもの芽を最初から摘む社会って、どうなんでしょうか」と言われた。私もその取材を通じて、「なんかおかしいぞ」って。そのときは「なんか」が全然わからなかった。けども何かおかしいなと思い始めて、取材を進めました。

ちょうどその時、朝日新聞の書評欄に、「子どもの貧困」という明石書店から出た、松本先生らがメーンになって書かれている本の書評がでたのです。それを読んで、「お、これやこれ」と思ったわけです。この話がすごく通じる！と思いました。6月に立教大学で1回目の「子どもの貧困研究会」というのを、本の出版に合わせて開くというので、すぐさまそこに行きました。そこで初めて松本先生にお目にかかるのですが、たくさんの今まで表に出てこなかった子どもの貧困研究について地道

に活動されてきた方、当事者の方がいた。例えば児童養護施設出身で、学校を卒業してすぐに自立しろと言われてもなかなか難しい人達の当事者団体を最近つくった代表の方。いろいろ話を聞いているうちに、これは1個ずつ調べていかないとわからないなと思いました。

私たちは記事を書くときに、デスクと呼ばれる上司に原稿をみてもらいます。指摘をうけて仕上げ、オッケーが出れば、掲載されます。そのデスクが、「子どもの貧困って何？」と思ったり、第一読者である編集者が理解できなかったりすると「載せられない」「分かるように書き直して」と言われるわけです。誰もが捉えどころがなくて、他人にちゃんと納得してもらえる説明が私自身にも出来ていなかったので、実態とデータと、あとは今まで研究されてこられた研究者の方にあたっていくというところから始まりました。

やっているうちに、私の中でこういう思いが出てきたわけです。一つが、複雑で困難な事情を抱えた家に生まれた子とそうでない子の学力や進路・健康だけじゃなくて意欲にまで差が生まれるというようなこと。そして、貧困問題が個人や家庭の問題にされてしまっているということ。それから「親の失敗」、例えば離婚、解雇といったことを子どもに引き継がせる社会でいいのか、という気持ち。それと、例えば虐待が起きた時に多いのが「あんなひどい親が悪い」とか、「離婚した親が悪い」と言う単純な親批判というのは果たして解決策になるのだろうかということ。子ども目線で考えることが大事なんじゃないかっていうこと。こういった子ども時代の貧困が将来どういった不利をその子に与えるのか、これを放置していたら日本の社会は将来どうなるのだろうか、という思いが次々と芽生え始めました。

2．取材を通して見えた現実

これは全部、今日いる若い皆さんに考えてほしい。こうやって大学で学んでいる皆さんに、もう少し考えてほしいなと思うことです。

まず、公表データ。子どもの貧困率が15.7%[1]です。40人学級に6～7人、低所得家庭の子がいるということ。虐待死する子どもの数が心中以外で年間51人日本にいます[2]。ということは週に1人の割合で、日本のどこかで虐待によって子どもが亡くなっているということ。そして、高校中退の数が5万3千人くらい[3]。5万3千人がどのくらいの規模なのか計算したのですが、1学年6クラスで40人学級計算すると、5日に1校、高校が丸ごと無くなるのと同じくらい、高校から大体15～18歳くらいの子達が消えているということです。その子たちは何をしているのだろうか。学校やめた後のことを考えました。

貧困とはどのくらいの生活レベルなのでしょうか。単身世帯ですと112万円の可処分所得。年収から税金など色々引かれて手取りとしてもらえる分のことです。4人世帯だと224万円、月18万6千円くらいになる。「18万6千円か、4人で。まあまあやっていけるかも」と思われるかも知れない。文科省が公表している子どもの学習費調査によると、学校や給食、塾代や習いごと、スポーツ活動などに使われる費用が平成22年度で小学校だと年30万、中学生で46万、全日制高校で39万円です。中学生と高校生が一人ずついたら、80万円以上が教育費に消えるということになります。

それから、無保険の子ども達がいました。国民健康保険料を親が滞納したら、子ども達にも資格証というのが渡されまして、いったん窓口で10割負担になってしまう。3万2千人いることが2008年にわかりました。これは、後々法律が改正されて18歳未満の子には、原則3割負担の保険証が出るようになりました。けど、私が最初に取材した時は無保険の子ども達が存在していて、学校の保健室に、「先生、保険証ないから湿布ちょうだい」と言って、けがをした子たちが病院代わりに保健室に来ることがあったという話がありました。

ちょうどこのころ、堺市の健康福祉部の理事だった道中隆さん（現・関西国際大教授）が生活保護受給世帯を調べて、どのくらい生活保護の受給が世代間連鎖しているのかを調べられました。受給している母子家庭の4割のお母さんが、自分

も生活保護家庭で育っていたということがわかりました。そして、母親が精神疾患3割、ほかにも低学歴(中卒・高校中退)、10代の出産、DV被害、子どもが病気であるとか、子供が薬物中毒、窃盗、売春など3～4つの項目が重なっていました。

次は、学力と中退の関係をみていきます。2007年度に大阪府立全日制高校で、進学校といわれる17校の平均の中退者は1年間で2人です。授業料免除してもらえる家庭というのが8％。中退者が20人～39人いる学校は16校あったのですが、その平均中退者が年間29人です。この16校の平均の減免率は26.6％。そして年間中退者が40人以上いる学校が全部で27校ありました。平均の中退者人数は77人、平均の減免率が32％というふうに、中退者が多い学校ほど減免率も高くなります。

これは大阪だけの現象なのか、ということですが、埼玉県立高校の元教員、青砥恭さんという方が調べられています。04年度に埼玉県立の全日制高校に入学した子たちの高校をA～Eまで5グループに分けました。Aというのは、埼玉県立高校の筆記試験200点満点中平均で166点くらい取る学校。B・C・D・Eと下がるにつれて下がりまして、Eで200点満点中60点。5教科合計です。2004年度に入学して06年度に最後卒業しますけども、入学してから卒業するまでどれだけやめていったかというのを「減少率」として計算し、3年生の時の減免率と合わせてみています。そうすると、学力が高い学校では、最後まで卒業していく人が多いし、3年生のときに授業料減免された割合も3.6％。でも、学力が下がるにつれて中退者は増え、授業料の減免率はあがるということがわかりました。

高校中退した後どうなっているのか、いろんな高校の先生に聞いたんですけども、時々メールが来る、時々電話で喋るというのはあっても、公に追った調査がなかなか無かった。内閣府が2010年に各都道府県教委を通じて、辞めた人が今どうなっているのかを調べました[4]。有効回答1176ですが、働いているのが半分強、学校に通っているが30％、通信制50％弱、全日制・定時制33％。休職中、家事手伝い、妊娠育児中、何もしてないという人の割合がわかりました。

その調査のなかで、母子世帯が21.1％いたのです。国勢調査と比べると、15歳～20歳未満の子供がいる母子世帯の割合の3.6倍。父子家庭も3.2倍にあたるということがわかりました。

3．子どもの貧困はどのような姿をとるのか

今から、当事者のお話をします。埼玉県立小児医療センターに2010年の年末、行きました。新生児集中治療室と継続保育室という部屋があって、そこに赤ちゃんが42人いました。この中で、もうすぐ退院する赤ちゃんのうち、行き先が乳児院の子がいました。小児医療センターには、わりとリスクが高い出産で運ばれてきます。このセンターから直接乳児院に入るのは、この取材の時、この年6人目でした。2004年から2006年度は、大体2人ぐらいだった。自宅に一度も帰らずに乳児院に行く子は毎年2人だったのですが、2007年度から8人前後になって、8年間で41人いた。病院のソーシャルワーカーの方が調べられたのですが、2009年度は乳児院が満員だったので、2人は退院まで200日以上ここにいた。なかなか親が面会に来てくれないし、病院に行くまでの交通費がないとか、仕事が休めないとか、とにかく孤立している様子はわかるけども、病院として何ができるのだろうか、という話でした。

次は保育園、小学校・中学校。これはある園長先生からのお話です。保育園は3月末で年度が終わるので、4月からも通い続けるのなら、継続申し込みというのをしなくちゃいけない制度がある。ところが、あるお母さんがそれをしてなかった。結局退所させられて、小さな兄弟だけで家で留守番をさせられている。園長が気になって見に行ったら、部屋はゴミだらけだし、水道は止められているし、お母さんが買ってきたお弁当を朝と昼に分けて食べているという状態。園長先生はすぐに「この子らを保育園に戻してほしい」と役所に連絡してまた保育園に通えるようになったということでした。

次は小学校３年生のＢちゃんです。彼女も母子家庭で生活保護を受けていました。お母さんは中学しか卒業していませんって自分で言っていましたし、家族が事業に失敗してから、家族が皆てんでばらばらになってしまって、自分の実の親の援助は全く受けていないということ。お母さん曰く、Ｂちゃんは学校でいじめられているということで、学校に行かせてない。不登校だと何が起こるかというと学力がつかない。お金のやりくりがとても苦手で、保護費が次の支給の日までもたない。例えば水道が止められたりして、トイレは公園に行く。自分で食事を作ることがお母さんはなかなかできなくて、買ってきたものをいつも食べているというようなことが続いていました。

次は中学２年生の男の子です。学校の先生が彼の家庭のことをこういう風に言っていました。母子家庭です。学校のお昼はお弁当です。最初の方は、お母さんは頑張って持たせていたのですが、だんだん持ってこられなくなって、結局、他の生徒が自分のお弁当箱のふたをもって、「今日○○におかずあげるの誰？」といった感じで、弁当箱のふたをもって、少しずつおかずをもらってその子にあげていた、という話。やっぱりプライドも傷つくし恥ずかしいし、ということで、昼ごはんの時になると教室から消える。ノートにひらがなが多くて、例えば中学校の校という字がひらがな。１冊のノートに５教科をまとめていたということでした。お母さんと毎回話をして、お母さんは「なるほどなるほど」と理解を示すような態度をとるのだけども、変わる様子が全然ない。「命の危機にさらされているっていうわけじゃないけど、ほっとくこともできないし、どうしたらいいのか」と学校の先生はおっしゃっていました。

高校３年生の女子生徒は、お母さんが心の病気だったため、年金をもらっているおばあちゃんと２人暮らしをしていました。その年金が収入としてみられ、定時制高校に通っていたんですが、授業料の減免を受けられず、滞納していました。バイトで払おうと思ってバイトをするのですが、非常にブラックなバイト先で、給料未払い。ただ働きしたまま、結局誰にも相談しないで辞めたという話。学校から授業料の催促状だけ来る。

フリーター18 歳の女性ですが、小学生の時、お父さんの暴力で両親が離婚。母子で生活保護を受給してなんとか生活していく。勉強がとても苦手で、３ケタ割る２ケタの割り算が今も出来ないと話していました。そこからつまずいた。「誰か勉強教えてくれる人とかはいなかったの？」と聞くと、お母さんはストレスたまるとすごく自分のことをたたいたりして、お母さんには聞けなかったし、学校の先生から声をかけてもらった記憶もない。お母さんが再婚するのですが、義理のお父さんも非常に暴力をふるう人だった。何回か警察を呼んだことがあるくらいだったんですけども、それとは別で、高校１年生の時に人間関係につまずいて中退します。中退する時、「お母さんや義理のお父さんとか家族は誰か止めたりしなかった？」と聞くと、「あんたみたいな子は何やったって続かないんだから、やめた方がいいんじゃない」ということで、引きとめる人がいなかった。あっさりと中退してしまうんですね。バイトしようかとコンビニのバイト面接に行きますが、ここで言われたのが「高校生活を全うしない人が、仕事がちゃんと責任もってできるわけがない」と言われて、採用されない。仕事をさがしているけどもなかなか見つからないという状態でした。「夢ある？」って聞いたら、「人並みの生活がしたい」「友達が欲しい」と言っていました。

共通してみえてきたものがありました。若いのにみんな疲れている。中退した子というと、なんとなく不良とかヤンキーではないかと思っているかもしれませんけども、そんな元気があったらまだいい方。もっと大人しい子たちばっかりでした。若いのに疲れている。夢は人並みの生活だって言うくらいですから希望がないんですよ。こういう困難な子どもたちがたくさん通う高校の先生曰く、「彼女たちは希望を持たない方がいいんだ」と。希望を持ったら裏切られるというか、達成できないときのがっかり感といいますか、「どうせ私は」みたいな気持ちがすごく大きいから、夢を持たな

いのが自己防衛だという。

意欲が高まらないと、無職になったり簡単に仕事を辞めたりすることにも繋がります。虐待やDV、家族の病気、特にお母さんの精神疾患は生活を不安定にさせていく。小中学校時代のいじめや不登校は、当然学力の低下につながります。適切な支援もないし、人間関係が非常にもろい。孤立しやすい。お金が無いということは、ただの貧困では終わらない。いろんな不利をどんどん呼び込んでしまって、何が何だかわからないうちに全部繋がってしまう。そういうきっかけになるということがわかりました。最初に母子家庭の取材をして、なんかおかしいなと思って取材を始め、無保険の話になり、取材しているうちにいろんな高校の先生や中学校の先生と知り合うことになって、中退をすべて自己責任で片づけていいのか、という問題をまとめました。その連載の（下）の中には、18歳で未婚の母になり、生活保護を受けている子の話や、ホストにでもなってお金を稼げばそれでいいんじゃないという子、あんまり夢が無いという話をまとめました[5]。

4．定時制高校の不合格者問題

この取材の中で、定時制高校の先生方や生徒さんに出会いました。中退した後に定時制高校に入り直す子たちがいるし、定時制高校に大人が作った矛盾を一身に背負った子どもたちが集まってくることが見えてきた。私も定時制高校といったら、昼間働いて夜勉強するところというくらいで、定時制高校の成り立ちから考えると、夜勉強して高校卒業資格を取るという感じなのかなと思っていました。ところが、今の定時制高校は、小中学校時代にいじめ、不登校、体罰などで傷ついて、不登校になって、学校に来てないから内申点がない、定時制高校だったら行けるのではないかと先生に勧められ、貧乏だから生活費を稼がなくちゃいけない、けれども高校を出たいから、というような子たちが来ていました。

定時制高校の定員がいっぱいになって入れないという事態が、この取材をしている間に起こりました。2009年の3月です。高校入試は一回目の試験で定員がいっぱいにならなかったら、空いている分だけ追加募集や補欠募集、二次試験という呼び方で試験をします。大阪の定時制高校が欠員募集として実施する二次試験で、167人が不合格になることが起きました。なぜか。この前年、2008年、橋下さんが知事に就任しました。ここで私立学校への助成金を削減しました。助成金を削減すると何が起きるか。私立の高校が、授業料をあげました。そうすると、行かせる方としては負担が重くなります。一方、2008年の秋、リーマンショックが起きました。経済的な理由で私立学校はちょっと、となって公立志向が高まります。案の定、私立の専願率がこの年、大阪府内で過去最低になりました。最初はみんな全日制を目指します。公立の全日制に志願が集中します。特に倍率が高くなったのが、学力困難校といわれている高校でした。で、どうなるか。落ちる人が多いですよね、当然。落ちた子たちは、私立高校は避けているわけです。そうすると公立の学校、次どこ受けるってなる。1回目の試験で定時制高校を目指す子は少ないんです。だから定時制高校にはすごく空きがある。そこに公立の全日制を落ちた子たちが、殺到しました。それで計算上、200人以上が落ちることになったのですけども、一応留年生の枠というのがあって、進級できなかった子たちがもう一回同じ学年をするために、その子たちの分だけ別に枠がある。それが大体定員の5％。それを利用して合格者を増やしました。でも、167人の不合格者が出ました。

大阪だけなのか、他のところも調べました。東京や京都や愛知でも、同じようなことがいっぱい起きていることがわかりました。その時にまとめた記事が、「定時制高校志願急増」[6]。これを書いている日、3月26日の晩に書いているのですけど、「200人近く定員をオーバーして、落ちるのがわかっているのに、何にもしないんですか」と何回も府教委に電話して確認しました。「本当にいいんですか、本当にいいんですか」と何回も聞いたのですけど、「入試要項は前から決まっています」だ

け。この記事が出た日に、急に府教委がもう一回補欠募集をすると言い始めた。結局、何人の枠をつくったかというと、落ちた人数と同じ167人だった。それでも30人近くがやっぱり入れませんでした。

次に、各都道府県教委にアンケートを送って全国調査をした。1000人以上の子達が定時制高校にも入れないことが起きていることがわかりました。定時制の入学者が毎年増加していることも、文科省の学校基本調査を追ってわかりました。中学の卒業者がピーク時の1989年は2.26%。バブルの時代、底を打ちます。1.86%。しかし、2009年に3%を超えました。定員に対する志願者数も100%を超えました。定時制も必ず不合格者が出てしまうというような事態になっているということがわかりました。

なんでこの時代に定時制高校に来るのか、ということを想像してみると、いろんなことが見えてきたということです。定時制は教育の安全網、最後の砦と言われているけども、それが今崩れている。生活保護受給家庭の子ども達に勉強を教えているグループの人が話していましたが、「定時制高校って必ず入れてくれるところだと思っていたのに、こんなことになるとは」と驚いていました。定員に空きがあるのに入れない地域もあり、逆に地域によっては空きがあれば全員入れるところもあります。

5．イギリスの取り組みと学校

新聞記者の仕事は、「なんでこんなことが起きているのか」という疑問と、「こんなことを許していていいのか」という思いの2点に尽きる。そういう気持ちで取材を進めていくと、色々と課題が見えてきました。「大変なことがあるんですよ」と言うだけではなく、読んでいる人が「じゃあどうしたらいいんですか」「私には何ができるんだろう」と思った時に、応えられるものを出していかないとダメだと思うようになりました。

そのうちの一つが、子どもの貧困の先輩格であるイギリスで、どういった取り組みをしているのか取材に行きました。虐待予防は生まれる前からの取り組みだったり、学校に福祉的な機能をつけていたり、子どもの貧困を放置していると社会に不利なんだというようなデータや試算をしたりしていました。

子どもセンターといって、5歳未満の子と親が必要な情報や支援をえられるサービス拠点を全国に3500か所つくっていました。日本でいうと保育園のような機能もあるし、訪問支援、親の再就職支援、助産師さんによる10代の妊婦のグループワーク、借金・住宅相談、育児サークル活動の拠点など様々。ベビーマッサージのクラスでは、参加したら赤ちゃんの歯ブラシや離乳食の作り置き用パックをあげます。

子育ては親育て、という考え方でやっている団体を何カ所か訪れました。親子関係は最初からあるものじゃなくて、親になったことに気付いてもらうとか、目覚めてもらうとか、親としての自信をつけてもらう親育て。特に問題を抱える親は、親自身が学校や地域で良い思いをしていない。先生に対しての不信感や社会・地域に対しての不信感を持っているので、上から目線で教える態度は拒否される。どちらかというと寄り添い型や伴走型。親が自信をつけていくと、子どもの自尊心や理解力の発達に効果があるという調査がありました。親を判断するのではないと。親を判断すると逆効果なので、明らかに問題があると思っても、上からの指導はしないということでした。

ホームスタートという団体があります。ボランティアのお母さんが何か問題を抱えているお母さんの元に週一回とか二週間一回、決まった時に訪問して、そのお母さんの課題を解決する。解決したら支援が終わり。例えばあるお母さんは違う土地から引っ越してきて、友達ができず、孤立した。自分の子どもが鼻水をたらしたり、こけたりしただけで怒鳴っていた。心身ともにぼろぼろだったところを、一歳児健診の時に看護師さんが気付いた。それで、このホームスタートという団体に繋いだ。そのお母さんの孤立感を解消するという目標を立てて、週三日訪問。例えば一緒に買い物に

行くとか、一緒に子どもと遊ぶ、お母さんと一緒に家事をやる。

日本でも 2009 年にホームスタートジャパンという団体が出来て、本格的に活動するようになっています。例えば、乳幼児を連れて遊びに行く児童館みたいなところが苦手なお母さんがいます。知らない者同士、何をしゃべったらいいかわからない、出かけるのがすごく苦痛という悩みがあります。だからついてきて欲しいというオーダーに応える。逆に田舎だと、自分たちがあちこち出掛けていると近所の人に「このあいだどこそこに出かけてたわよね」ということを噂されるのが嫌だから、うちの家に遊びに来てほしいというオーダーに応えます。そういう一日中外に出られないお母さんや、双子の子育てで大変なお母さんのお手伝いを日本でもやっています。

イギリスのホームスタートは個別訪問じゃなくてグループ活動もしています。小学校の空き教室を使っています。小さい子連れでなかなか外に出にくいお母さんたちを、集めています。お母さんたち同士は歓談、子どもたちは専門のスタッフがついて遊んでくれる。

学校に福祉的機能を持たせるという点ですが、これはエクステンディドスクールという名前で展開されていました。具体的には朝食を家で食べられない子ども達に朝食を提供したり、放課後の居場所を提供したりします。どんな活動をするかは各学校によって違いますが、8000 以上の学校が様々な活動を導入しているそうです。導入した学校は、出席率や成績、生活態度が向上するという調査結果が出ています。

それから、取材にいった学校には家族支援員が配置されていました。教育の問題よりも親が抱える問題を支援してくれる人です。私が取材に行った移民の非常に多い地域の小学校では、お母さんが両手に荷物、子ども七人抱えて学校の支援員のところに来たということがありました。家賃滞納で今日家を追い出されました、どうしたらいいでしょうって。支援員は「子どもたちは自分達が預かるので、お母さんはシェルターがあるからそこの手続きに行ってください」と相談にのった。子どもは絶対に小学校中学校は来ますから、その子どもが来るということは親をキャッチできるということなのです。「とにかく学校に来てほしい」ということでした。

ここで思ったのが、日本だと「また学校の先生にそんな仕事振って」みたいな感じで文句出る。でも、これは「学校が」やるのではなくて「学校で」やっているというだけ。学校は地域の中核ですから、学校をあくまでも拠点としてやるという考え方は、非常に合理的だと思いました。朝食クラブでは、シリアルとトーストとフルーツとジュースが出されていました。補助が出るので、子どもに負担はないということでした。

教育施設でやるには予算も必要だし、世間を納得させることが必要ですよね。どうしてこういうことをやらなくちゃいけないのかという説得材料として、ある試算があります。13 歳から 14 歳で以下のうち 5 つ以上経験した子は学校に馴染めなくなる可能性が、1 つも経験してない子の 36 倍もあるというような試算です。親が就業していない、低所得、親に職業資格がない、質の悪い過密住宅、母親の精神疾患、親の重病・障害・虚弱、食料・衣料を買えない貧困。16 歳から 18 歳で教育を受けている、仕事に就いている、訓練受けている、という状況にないと失業、長期失業・低所得で 81 億ポンドの社会保障や治安費が必要になるという計算もあります[7]。

6．日本での取り組み

では、日本ではどうなのか、という話にうつります。こうした試算はなかなか見つからない。でも、今日本で子どもの貧困に対してどういう対策が取られているかといったら、一つ大きなのは無料学習会と居場所が広がっています。残念ながら、生活保護世帯の子への学習支援に限定されてしまっていますが、自治体がする場合、国が費用の 10 分の 10、補助します。昨年度 73 自治体。この 3 年間で 7 倍。これからもっと増えてくると思います。1 番有名な事例としては、埼玉県です。2010

年度から中３学習会といって、生活保護世帯の中学３年生を集めて、県内５カ所でマンツーマンで勉強を教える教室を始めました。今、中学１年生まで拡大して、場所も 20 か所くらいに広がりました。

神奈川県の相模原市は昨年５月から、中学生だけじゃなく、高校生やニート、フリーター対象の居場所をつくりました。これは結局高校に送り出したはいいけども、孤立しがちなので、すぐに中退したりドロップアウトしたりしてしまう。そうならないように見守りを続けなきゃいけないというので、昨年から高校生やニート・フリーター対象の居場所を始めました。

生活保護家庭の子ども達の学習支援教室で教えているのは皆さんのような大学生が主軸です。滋賀県の大津や守山では、京都の学生ボランティア団体が中心になって勉強を教えます。勉強だけでなく映画鑑賞やテニスもする。こういう動きに刺激を受けたのが愛知県半田市の日本福祉大学の学生さんたちです。市に自分達から他の自治体でこういうのをやっている、自分たちも福祉にかかわる学生としてやりたいということで、市の方に中３学習会を提案したら、市の方も渡りに船だったということで、市が児童扶養手当を受給している母子家庭・父子家庭に無料学習会をやりますので、ということで、案内を出してくれました。

守山の学習会では、来る子よりもボランティアの学生の方が多くて、１対３ぐらいで囲まれているんですけども、子どもたちが来て勉強をしていました。他にも勉強だけじゃなくって、いろんな支援があります。北海道ですと釧路市で、NPO 法人「地域生活支援ネットワークサロン」がコミュニティハウス冬月荘という場を運営し、学習会をしています。この建物は、北海道電力の元社員寮です。ここは２階に生活保護を受給している人たちが一時的に住んでいるので、その人たちが勉強会になると１階に下りてきて、中学生に勉強を教えます。自分たちにも役割がある、居場所がある、出番があるということをもって、ここから実際生活保護を抜けたという人たちもいます。

高知では地域の診療所が、地域の事情を調査すると、とても勉強できるような状況にない中学生の子たちがいると分かった。例えば家が非常に狭くって、兄弟が多くって、あるいはいつもお金がなく夫婦喧嘩ばかりしていて勉強する状況にないという子たちがいるというのがわかった。地域の中学校と協力し合って、中学校から推薦してもらうという形で診療所の部屋を貸して、地元の大学生や先生に、ボランティアで教えてもらっているということをしています。東京では、普通の会社員の女性が、自分が６人兄弟の長女で、子どもの頃好きなことが思うようにできなくて本当につらかったと。そういう思いを今の子どもたちにさせたくないっていうので、公民館の１室を借りて、どんな子が来ても勉強教えるよというのを始めたのです。最初の２か月、何にも広報していませんから、誰も来なかった。でも、毎週土曜日午前中、そこに座り続けて、そうしているうちに隣の部屋を借りている人が「何やってるんですか？」という感じで声をかけてくれて、かくかくしかじかっていうところから広まって、3 か所に増えました。親の所得とか関係なく、子どもたちが土曜日の午前中、安心して過ごせる場です。

他にも勉強だけじゃなくて、生活の支援や中退後の支援があります。京都の NPO 法人「山科醍醐こどものひろば」では、ひとり親家庭で、夜ひとりで過ごさなくちゃいけない子どもたちのためのトワイライトステイをしています。まず学校から帰ってきます。帰ってきたら空き店舗の１室を借りていますが、そこで大学生のボランティアが待ち受けています。例えば一緒に公園に行ってバレーボールしたり宿題をしたりして、夕食はこの商店街の近くの食堂で作ってもらったご飯を皆で食べる。そのあとゲームして遊んで、最後にお風呂屋さんに一緒に行ってお風呂に入ったあと、家に送り届けるという支援です。これは「安定した生活あってこその学習」ということです。

福岡では、普通の主婦の方が「ストリートプロジェクト」といって中退した人たちの高認試験の教室を無料でやっています。この女性も自分の娘

さんが非行にはしり、その仲間を自分の家に連れてくるようになったのですが、その子たちが本当にひどい生活というか、家はあるけども家に居場所がないというような女の子をたくさん見てきて、なんかやらなくちゃいけないということで始めたところです。

これは山科醍醐こどものひろばの写真です。皆でご飯を食べて、ゲームして、弁当箱を返すついでにお風呂に行きますというところです。こちらは相模原で、皆で料理をしています。当事者たちはあまりご飯をたべてないといいます。お金がないので。配った新聞記事にも書いていますが、肉を食べるのは 2 週間に 1 回、業務用スーパーで買った鳥のひき肉だと言っていました。とにかく空腹を解消するということを第一の目的にし、さらに皆でこうやって食べながらコミュニケーションをとり、このあと高校に行ってない子たちが勉強をする。ピースという名前の場所です。なんでピースかというと、「あなたは社会になくてはならない、欠けてはならない大事なひとりだ」という意味を込めたということです。

最後ですけど、大阪の箕面市というところで、地域通貨を作りました。「まーぶ」といいます。これは子どもたちしか使えない通貨です。学んで遊んで働いて手に入れられる通貨です。例えばニュースレター配りだと時給 100 まーぶ、朝市の手伝いでは働き具合で 100〜200 まーぶ。学童保育のような地域の児童館で、夕方子どもたちが来ます。急きょ「畑の草むしりするからやる人 50 まーぶ」と言ったら、手を挙げてやる子たちがいる。まーぶはお祭りや学童保育でのおやつ代など自分で使える。

中には非常に生活が厳しい子たちがいます。夏休みになるとお昼ご飯を食べられないというようなことがあるので、ここで食事を出すんですが、100 まーぶで食べられる。その 100 まーぶも、例えば稼いだまーぶをすぐに使ってしまう子どももいますから、洗い物と配膳それぞれ 50 まーぶにして、二つやれば 100 まーぶになって、次の日の食事を食べられる仕組みを作っています。社会に出たら稼いで、自分でやっていかないといけないんだよっていうことを、子どものころからわかってほしいということで始めたということです。これはみなさんと同じくらいの、25〜26 歳の女性が「まーぶ」を考えてやっています。部屋の中にハローワークのような掲示板がありまして、やってほしいことって書いてあるんです。例えばニュースレター配りとか、朝市手伝いとか。ここに雇用条件が書かれているわけです。これだけでなく、横には「私、こんなのできます」っていう自分ができることをアピールするボードがあります。例えば「DS のソフト売ります、1000 まーぶ」と書いてあるんです。ほかには、例えば「勉強教えます」とか、自分たちで仕事をもらったり仕事を作ったり、ミニ社会を作って楽しくやっているというところです。

以上です。新聞記事を配っています。「生き抜く力伝えたいから」[8] は、いま紹介した「まーぶ」と先ほどの相模原のピースの話を詳しく書いています。次は NGO の調査の記事[9] です。これは子どもが 6 人〜 7 人に 1 人、貧困だというのを、子どもたちに伝える。実際そういうことがあるんだよという話をして、「どんな気持ちかな」っていうふうに、子どもたちの視点でこの貧困を考える実践があったという話です。

最後ですが、暉峻淑子さんのインタビュー記事があります[10]。この記事は 2 〜 3 年前、入試問題に使われました。東京の大学です。これを読んであなたの考える豊かさとはなにか、豊かな社会とは何か、そしてその実現のためにあなたは何ができるか、1000 字以内で答えなさいという問題でした。なんという難しい問題でしょう。皆さん同じ大学生なので、そう問われたらなんて答えられるだろうか、一度想像してみていただけるといいかなと思います。

―以下質疑応答―

質問：教育学部 3 年の A と申します。貴重なお話ありがとうございます。最近ニュースなどで生活保護の引き下げの問題が結構取り沙汰されてる

と思うんですけども、そういう状況についてどう考えますか。

中塚：素晴らしい質問をありがとう。よくご存じですね。生活保護切り下げのニュースに注目しているだけでも素晴らしいと思いました。結論から言うと、特効薬というか世の中、急に価値観を変えるなんてことはできないんだなってことをずっと思っています。今までのような話を記事に書くと、「勝手に離婚しておいてお金が足りないなんて自分勝手」とか、「うちの近所の母子家庭の家に男が出入りしている」など。「派手な服着て雨の日はタクシーに乗っている」というような話。あるいは中退者の話を書くと、「取り上げている人が不真面目すぎて同情する気も失せます」という読者からのお便り、メール、電話が来ます。

例えば、「貧しくても頑張った人はいるんだから、やっぱり努力不足じゃないか」という意見もきます。それって多分、誰しもどこかで、ふとそういう風に思ったり、何か引っかったりすると思うんです。けど結局、私が新聞記者としてできるのは、そういうことをずっと書き続けることだと思うんです。だって毎日ちゃんと最初から最後まで、ふむふむと思いながら読んでくれる人って、時間がある人なんですよね。なかなか皆忙しいからそこまでできない。けど、やっぱり心のどこかに引っかかって、「あぁそういえば」と、行動に移してもらえるような、皆のハッピーにつながるようなきっかけ作りができれば。非常にもどかしいのですけど、それしかない。特効薬はないと思います。

しかし、政治で声の大きい人や社会的に地位の高い人が何か言いだすと、すぐ変な流れになるので、そこだけは厳しい目で見続けなくちゃいけないし、書き続けなくちゃいけないと思っているのです。私や新聞が指摘しただけで納得してもらえるものじゃないので、こうした機会に考えてもらって、拡散してもらいたい。皆さんの力にかかっています。本当によろしくお願いします。

本稿は、2013年1月29日に持たれた教育学部講義「教育福祉論」における講演を文字化した記録に、講師の中塚氏が修正、加筆したものである。ご多忙にも関わらずご講演頂き、修正、加筆作業にお時間を割いて頂いた中塚久美子氏に感謝申し上げる（教育福祉論担当　松本伊智朗　鳥山まどか）。

注

1）平成22年国民生活基礎調査（厚生労働省）。
2）子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について（第8次報告）厚生労働省。
3）平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省）。
4）若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）報告書（解説版）内閣府。
5）2009年3月5、6日　朝日新聞大阪本社版　朝刊生活面。
6）2009年3月27日　朝日新聞大阪本社版　朝刊1面。
7）宮本みち子・善積京子編著「現代世界の結婚と家族」（放送大学教育振興会、2008年）209-221ページ。
8）2012年9月21日朝日新聞大阪本社版朝刊生活面。
9）2010年11月12日朝日新聞大阪本社版朝刊生活面。
10）2010年9月26日朝日新聞東京本社版朝刊生活面。

文献

中塚久美子著「貧困のなかでおとなになる」（かもがわ出版、2012年）.
浅井春夫、松本伊智朗、湯沢直美編「子どもの貧困」（明石書店、2008年）.

（朝日新聞大阪本社生活文化部・記者）